資　料

在宅一人暮らし高齢者に関する研究の動向

Trends in research for community-dwelling elderly living alone

浅川　典子，橋本志麻子，三好　理恵

Noriko Asakawa，Shimako Hashimoto，Rie Miyoshi

キーワード：一人暮らし高齢者　在宅
Key words：elderly living alone　community-dwelling

要　旨

今後高齢者人口が増加する中で，増加する一人暮らし高齢者の支援は大きな課題である．本研究では一人暮らし高齢者に関する研究の動向を概観する．医学中央雑誌 Web 版 Ver4 で「独居」「高齢者」「在宅」をキーワードとして，1983 年から 2010 年 5 月の原著論文を検索した．得られた 125 件から，一人暮らし高齢者に関する言及がない文献，事例に対する支援方法の紹介，疾病コントロールの解説などを除いた 53 件に，ハンドサーチにより得られた 6 件を追加した計 59 件を分析の対象とした．その中で，一人暮らし高齢者のみを研究対象とした文献は 36 件で，その約 4 割が質的研究，4 割弱が実態調査研究であった．研究対象の一部に一人暮らし高齢者を含む文献は 21 件で，その約 8 割が実態調査研究であった．援助者を研究対象とした文献が 2 件あった．59 件の内容は，生活の実態把握，健康管理，精神的健康や QOL，独居生活の継続，生活の中での思い，介護保険サービス利用，センサを用いての行動モニタリングの試み，介入・支援事例報告，震災被災高齢者に関するもの，援助者の支援の特徴であった．今後は一人で暮らす要介護高齢者の生活を支えていくための実効性のある支援体制の構築に資する研究の必要性があると考える．

Ⅰ．はじめに

2009 年の 65 歳以上の高齢者人口は過去最高の 2,901 万人となり，高齢化率は 22.7％である．高齢者人口は 2015 年には 3,000 万人を越え，その後も増加すると予測されている．総人口が減少するなかで高齢者が増加することにより，高齢化率はさらに上昇を続け 2035 年には 33.7％となると推計されている（内閣府 2010）．

高齢者の子どもとの同居率は大幅に低下してきており，1980 年にはほぼ 7 割であったものが，2008 年には 44.1％となっている（内閣府 2010）．その反面，一人暮らし高齢者は増加しており，1980 年に 65 歳以上の高齢者 1072.9 万人に占める一人暮らし高齢者は 91.0 万人（8.5％）であったが，2007 年には高齢者 2758.4 万人のうち 432.6 万人（15.7％）となっている（国立社会保障・人口問題研究所 2009）．今後も，一人暮らし高齢者の割合は増加を続け（内閣府 2010），2025 年には 680 万世帯と 2000 年の約 2.2 倍となる（小島 2005）と予測されている．

また，近年になるにつれて年齢の高い一人暮らし高齢者が増加している（工藤 2004），85 歳以上一人暮らし高齢者は 2000 年で約 27 万世帯（85 歳以上高齢者人口の 12.1％）であり，後期高齢者になれば家族と同居するという従来の住まい方，家族のあり方を変容させ

受付日：2010 年 9 月 30 日　　受理日：2011 年 2 月 7 日
埼玉医科大学保健医療学部看護学科　老年看護学

るような実質的な変化が生じていると指摘されている．一人暮らし高齢者の割合が増加する要因は，未婚率や離婚率の上昇，配偶者との死別後でも子と同居しない者の増加などであり（内閣府 2010），夫婦のみ世帯で配偶者の一方が死亡した場合 9 割以上は単独世帯に移行している（工藤 2004）と報告されている．

そのような背景から，一人暮らし高齢者の支援は大きな課題となると考えられる．そこで本研究では一人暮らし高齢者に関する研究の動向を概観し，今後の研究の課題について考察する．

Ⅱ．研究方法

データベースは医学中央雑誌 Web 版を使用した．検索対象期間は医学中央雑誌 Web 版 Ver4 で検索可能な 1983 年から 2010 年 5 月とした．「独居」「高齢者」「在宅」の 3 つのキーワードを含むことを条件に，原著論文を対象として検索した結果 125 件の文献を得た．若年者，家族介護者，入院中の高齢者などを対象としている文献，調査対象者の一部に一人暮らし高齢者を含むが結果で一人暮らし高齢者に言及していない文献，事例をもとに地域での一人暮らし高齢者を支える方策を紹介している文献，疾病コントロールについて解説している文献を除いた 53 件を対象とした．この他，対象とした文献の引用文献および対象とした文献が掲載されている学会誌等からハンドサーチにより得られた文献 6 件を追加し，計 59 件を分析の対象とした．

抽出された文献を経年変化および研究内容により整理し，一人暮らし高齢者に関する研究の動向を分析した．

Ⅲ．結果

1. 文献数の経年変化からみた動向

文献数の経年変化を表 1 に示した．一人暮らし高齢者に関する研究は 1980 年代から報告されているが，本稿で分析対象とした 59 件中，52 件は 2000 年以降に発表されており，それ以前に発表されていたのは 7 件であった．

59 件中，36 件は一人暮らし高齢者のみを対象とした文献であり，21 件は一人暮らし高齢者を対象者の一部に含む文献であった．2 件は一人暮らし高齢者に対する援助者を対象とした文献であった．

2. 研究方法別にみた動向

文献を研究方法別に整理した結果を表 2 に示した．研究方法は「実態調査研究」「仮説検証型研究」「準実験研究」「介入研究」「質的研究」で分類した．

用いられている研究方法の傾向をみてみると，一人暮らし高齢者のみを対象とした報告では「質的研究」が約 4 割と最も多く，2002 年以降，発表数の増加が顕著である．次いで「実態調査研究」が約 4 割弱であった．一人暮らし高齢者を対象者に含む報告では，「実態調査研究」が約 8 割とその大半を占めており断続的に発表されていた．

調査の実施方法については，質的研究はインタビュー調査によりデータ収集が行われていた．量的な実態調査研究においても，一人暮らし高齢者のみを対象とした研究においては，そのほとんどが家庭訪問による聞き取り面接調査によりデータ収集されていた．

3. 研究内容別にみた動向

研究の内容は表 3 に示したように，生活の実態に関するもの，健康の管理に関するもの，精神的健康や QOL に関するもの，生活の中での思いに関するもの，独居生活の継続に関するもの，介護保険サービス利用に関するもの，センサを用いての行動モニタリングの試み，介入・支援事例をもとにした報告，震災被災高齢者に関するもの，援助者の支援の特徴に関するものがあった．

生活の実態に関するもの

生活の実態に関するものとしては，1980 年代から独居老人の生活状況の実態（延近 1985）（桑原 1986）が

表 1　文献数の経年変化

年	1985	1986	1992	1993	1996	1997	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	合計
本稿の対象文献	1	1	1	2	1	1	2	3	2	7	5	5	7	9	7	5	59
一人暮らし高齢者のみを対象とした文献	1	1			1			2	2	4	4	5	4	5	6	1	36
一人暮らし高齢者を対象者に含む文献			1	2		1	2	1		3	1		2	4		4	21
援助者を対象とした文献													1		1		2

表２　研究方法別にみた経年変化

	研究方法	1985	1986	1992	1993	1996	1997	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	合計
一人暮らし高齢者のみを対象とした文献	実態調査研究	1	1							1	1	1	2	2	2	2		13
	仮説検証型研究								1									1
	準実験研究								1		1		2	1				5
	介入研究										1				1			2
	質的研究					1				1	1	3	1	1	2	4	1	15
	計	1	1			1			2	2	4	4	5	4	5	6	1	36
一人暮らし高齢者を対象者に含む文献	実態調査研究			1	2	1		1	1		3	1		2	2		2	16
	仮説検証型研究																	0
	準実験研究							1							1			2
	介入研究																	0
	質的研究														1		2	3
	計			1	2	1		2	1		3	1		2	4		4	21
援助者を対象とした文献	質的研究													1		1		2
	合計	1	1	1	2	2		2	3	2	7	5	5	7	9	7	5	59

報告されていた．1990 年代には，在宅の要介護，長期入院，特養入所者の特性の比較（黒田 1992），農山村地域の要援護老人の健康状態の把握（野崎 1993），老人クラブの会員を対象とした福祉施策の周知，利用希望に関する調査（堀井 1993）が報告されていた．

2000 年以降は多様な調査報告がなされている．一人暮らし高齢者の健康と日常生活の調査（本田 2002）では，要介護予備群は自立群と比較して視力低下や物忘れのある者，抑うつ傾向にある者が有意に多く，生きがいをもつ高齢者が少ないことが，前期高齢者と後期高齢者の特性比較（本田 2003）では，後期高齢者は視力・聴力が低下し，物忘れのある者が多く，抑うつ傾向の者が多いことが報告されていた．独居高齢者等の健康状態と生活リズム，生活状況の調査（石川 2003）では，独居高齢者は家事や生活維持のための諸活動を行っているが，買い物などは援助を受けており対人交流の場は自宅が多いことが報告されている．一人暮らし高齢者の実態調査（合田 2005）では，健康あるいは普通と自覚している者が多いが後期高齢者になるとその割合が減少する，非常時の連絡先が遠方の県外者のみの者がいることが報告されている．

在宅高齢者の認知機能の縦断変化の検討（岩佐 2006）では，一人暮らしと認知機能の変化との関連は認められていないとされている．在宅生活の危険や事故の調査（浅野 2006）では，薬の飲み忘れ，飲み間違いにより，特に独居の認知症高齢者に深刻な事例がみられたことが報告されている．

サポートに関するものも報告されており，サポート源に対する選好度の検討（権 2003）では，一人暮らし高齢者のフォーマル資源への選好度が高いこと，高齢者のサポート・ネットワークの検討（西村 2004）では，一人暮らし高齢者は家族同居の高齢者に比べて親族とのつながりが弱い傾向があり，女性は非親族により補完されているが男性は非親族による補完傾向は認められなかったことが報告されている．

健康の管理に関するもの

健康の管理に関するものとしては，独居高齢者の通院・服薬行動のノンプライアンスの理由（喜友名

表３　研究内容別にみた経年変化

研究内容	1985	1986	1992	1993	1996	1997	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	合計
生活の実態に関するもの	1	1	1	2					1	3	1	1	2				13
健康の管理に関するもの					1						1		1	2	1	2	8
精神的健康やQOLに関するもの							1	1				1	2	2	1	1	9
生活の中での思いに関するもの											1				2		3
独居生活の継続に関するもの									1		2	1		1	2		7
介護保険サービス利用に関するもの								1		1				1		1	4
センサを用いての行動モニタリングの試み							1	1		1		1	1				5
介入・支援事例をもとにした報告										1		1		3		1	6
震災被災高齢者に関するもの					1					1							2
援助者の支援の特徴に関するもの													1		1		2

1996），COPD 独居高齢者の HOT 安定期における自己管理（中村 2009），慢性疾患を持つ一人暮らし高齢者が認識する医療機関の存在（浅永 2007），高齢者が語るライフストーリーによる意味づけられた健康づくりの構造（石川 2008），大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題（河野 2009）の側面から報告されていた．また，食生活に焦点をあてて，配食サービスの有無別の独居高齢者の栄養状態（酒元 2004），食生活習慣の変容過程の分析（平松 2006），一人暮らし高齢者の食生活状況やホームヘルパーによる生活支援の実態（武田 2007）の視点から報告されていた．

精神的健康や QOL に関するもの

独居高齢者の精神的健康や QOL については，次のような視点から報告されていた．デイケア利用者の主観的幸福感に関する検討（南 2000），継続した治療を必要とする慢性疾患のある一人暮らし高齢者の QOL に関連する要因と要因間の関係の検討（富田 2001），要介護状態にある独居高齢者の主観的幸福感に関連する要因の検討（矢川 2005），山間地域で生活する一人暮らし高齢者の介護度の変化と QOL との関連を検討（多田 2006），訪問介護サービスを利用している独居高齢者の主観的健康観に影響する社会関係要因の検討（中尾 2006），軽度要介護認定者の抑鬱に関連する要因の検討（和泉 2007），要介護認定を受けている後期高齢女性の QOL と居住歴・生活・健康状態との関連の検討（森下 2007），大都市独居高齢者における子どもの有無，子どもとの関係と生活満足度との関連を検討（林 2008），精神健康度について家族形態別の違いの検討（一原 2009）である．

生活の中での思いに関するもの

高齢者の思いに関して，訪問看護を利用している一人暮らし高齢者の生活感情（松坂 2004）について，「生きてきた誇り」「一人で生きる現実の辛さ」「一人で生きていく意地」「今の自分を認める気持ち」「周囲の人々との日々のつながり」「生きる支えとなっている家族の存在」であること，要支援・要介護高齢者が生活の中で抱えている思い（鈴木 2008）について，「独居生活への思い」「自己の健康をとりまく思い」「独居生活を支える強み・励み」「独居生活をとりまくソーシャルサポートへの思い」「これまでに築きあげてきた人生観」であること，ペットがもたらす心理的効果（内田 2008）は，「細やかな養育経験への自負」「共生の認知」「ペットがもたらすメリット」「相互依存的な絆」「愛情の誇示」であることが報告されている．

独居生活の継続に関するもの

独居生活について，寝たきり度 J，A に該当する者の日常生活行動のマネジメントの構成要素（和田 2002）は「状況の認知」「方向性・目標」「方策」「評価」「その人の核となるもの」であり，通所介護利用者の自立生活の要素（福島 2004）は「健康意識に伴う日常生活行動」「他者との良好な交流関係」「社会参加」「配偶者・友人

の死に対する受容」「社会サービスの有効利用」「経済の安定」であることが示されている．

独居生活の継続について，一人暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法（田中 2004）は，「生活方法の変更」「受療と予防を中心とした保健行動」「在宅生活継続に対する意思」「在宅生活継続の見通し」であり，脆弱化後期高齢者の一人暮らしを支える要因（合田 2005）は「人生に対する意識」「持ち合わせている能力」「他者との関係性」「社会的基盤」であることが報告されている．

そして，退院後の要介護高齢者の独居の継続要因（井上 2007）は，「本人の強い意志」「心を許せる友人」「健康管理」「福祉支援」「家族の存在」「近隣の人の支え」であり，一方，独居困難の要因（柄澤 2008）は「疾病の悪化」「転倒などによるけが」「認知症による生活機能の低下」「その他の要因による生活機能の低下」である．また，独居後期高齢者の縦断調査（田中 2008）では，自立独居を可能にしている要因として，年齢が若く，運動時間が多く，不意の出来事に自分の判断で行動でき，心臓疾患がないことが示されている．

介護保険サービス利用に関するもの

2000 年に導入された介護保険サービスに関しては，独居世帯でサービス利用率が低くなる傾向がみられる（尾ノ井 2001）こと，中山間部におけるサービス利用の世帯類型別検討（奥村 2003）では，独居世帯は重度化に伴い在宅サービス利用者が減少すること，日常生活行動とサービス利用状況の検討（川崎 2007）では，単独世帯でサービスの利用群と利用なし群の生活活動得点には差が見られ，年齢区分が高くなるにつれ差が拡大していること，要支援高齢者のサービス利用者と未利用者の身体心理社会的特性の比較（河野 2009）では，利用者は未利用者に比べて独居高齢者が多いことが報告されている．

センサを用いての行動モニタリングの試み

2000 年以降センサを用いて独居高齢者の生活行動を把握する試みがなされている．台所周辺部に各種センサを設置し調理に伴う行動を検知（庄司 2000），テクノハウスに装備されたセンサで ADL，健康状態を把握（井筒 2001），水道，ドア，家電製品に設置したセンサで体調不良を推定（村上 2003），赤外線センサーを利用した生活状況把握（鈴木 2005）（品川 2006）の試みが報告されていた．

介入・支援事例をもとにした報告

様々な視点からの独居高齢者の生活支援に関連する試みが報告されている．

遠隔支援システム活用について，積雪寒冷地に居住する独居高齢者に対する IT を活用した在宅運動支援プログラムの導入（瀧 2007）と，中山間地域における高齢者遠隔医療システムの運用（菅原 2007）の 2 件が報告されていた．

また，高齢者のアクティビティケアとしてヒューマン型ロボットを導入した試み（鈴木 2005）が報告されている．

その他，認知症高齢者に対する行動変容アプローチ（三原 2003），一人暮らし高齢者の援助拒否と援助ジレンマの分析（楠本 2007），在宅高齢者を対象とした話し相手ボランティアの機能（保科 2009）について報告されていた．

震災被災高齢者に関するもの

阪神・淡路大震災の被災高齢者に関しては，震災前に家事援助を受けていた者の日常生活活動の経時的変化（長尾 1997）について，独居群は同居群より高い値を示していることが報告され，また，恒久住宅に住む一人暮らしの被災高齢者の生活力量の形成過程（中山 2003）について，他者の支援利用段階，隣人支えあい段階，地域貢献段階がみられると報告されている．

援助者の支援の特徴に関するもの

在宅独居高齢者の看取りを経験した訪問看護師を対象とした調査（仁科 2008）では，在宅で最期を迎えることを可能にする訪問看護師の援助内容は「高齢者の意思を尊重して関わる」「在宅死への高齢者の意思を確認し最善の方法に向けて考える」「高齢者の不安・苦痛に対処する」「在宅での看取りの実現に向けて準備する」「家族の思いを受け止め在宅での看取りに向けて心理的な準備をはかる」「在宅での看取りの実現に向けてチームの要として関わる」が示されている．また，山間部の住民組織である相談協力員を対象とした調査（合田 2006）では，一人暮らし高齢者が地域で暮らすための地域住民の支援の特徴として「暮らしの中での安否確認」「近所付き合いの中での身近な支援」「身近なネットワークづくり」「葛藤を抱えての役割遂行」が示されている．

Ⅳ．考察

文献の検討により，一人暮らし高齢者については特に 2000 年以降多様な視点からの研究が報告されていることが明らかになった．一人暮らし高齢者の独居生活継続の要因，生活実態や健康管理，精神的な側面など，これらの一人暮らし高齢者の生活の特性を明らかにする研究結果により，一人暮らし高齢者についての理解が促進されると考える．

なお，調査の実施方法から一人暮らし高齢者を対象とした調査の難しさを読みとることができた．質的研究は勿論であるが，量的な実態調査研究においても，その多くが郵送調査ではなく調査票を用いた訪問面接調査によりデータを収集する方法を用いていた．高齢者の場合

には視力低下や手指の緻巧性の障害などにより自記式調査票への記入が難しい背景があることが推察された．特に一人暮らし高齢者を対象とした場合の調査の特性であると考えられた．

また，認知症高齢者を調査対象としている研究はわずかであった．要介護高齢者を対象としている場合でも，面接時に明確な対応ができる者を対象として，認知症などにより聞き取り調査が不可能な者，認知機能に明らかな障害が認められる者は対象から除外されていることが多かった．そのため，対象となった文献から読みとれるのは，明らかな認知機能障害はない一人暮らし高齢者に関する知見である．

現在，認知症の高齢者数について正確に報告されたものはないが，2008 年の厚生労働省の報告書「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト」によるモデル事業の結果，後期高齢者の認知症の推定有病率は 20％と考えられると報告されている（介護保険情報 2009）．今後，一人暮らし高齢者が増加する中で，一人暮らしの認知症高齢者も増加すると考えられる．一人暮らし認知症高齢者の生活の理解，支援に繋がるような知見の蓄積が待たれる．

要介護高齢者の介護については，これまでは多くの高齢者が子世代と同居することで基本的な生活保障を享受してきたが，子世代との同居割合が低下し，高齢期の生活保障機能を受ける場所が世帯の外へと変容してきていること，また，これからは親族規模そのものが縮小することが予想されることから，親族に大きく依存する支援メカニズムを維持することは難しい（白波瀬 2005）との指摘がある．日常生活に支障がありながらも，様々なサービスを利用しながら一人暮らしを続ける高齢者が，少しでも長く在宅での生活が続けられる方策につながるような研究が求められる．

今回の検討では，一人暮らし高齢者を支援している者を対象とした研究はわずかに 2 件のみであった．今後は，地域で支援する専門職を対象に，一人暮らし高齢者の生活実態をふまえた支援のあり方について明らかにするなど，一人で暮らす要介護高齢者の生活を支えていく実効性のある支援体制の構築に資するような研究の必要性があると考える．

文　献

合田加代子 , 高嶋伸子（2005）: 高齢者の一人暮らしを支える要因に関する研究　A 町の一人暮らし高齢者の実態と高齢者保健福祉対策 , 香川県立保健医療大学紀要 , **1**, 11-18

合田加世子 , 高嶋伸子 , 太田武夫 , 他 1 名（2006）: 一人暮らし高齢者を支える地域住民の支援の特徴 , 香川県立保健医療大学紀要 , **3**, 17-22

合田加世子（2005）: 高齢者の一人暮らしを支える要因に関する研究　脆弱化後期高齢者の「我が家」での一人暮らしを支える要因 , 香川県立保健医療大学紀要 , **2**, 43-51

浅野祐子 , 堀内ふき , 川上智美（2006）: 在宅高齢者の服薬管理　茨城県内における調査から , 茨城県立病院医学雑誌 , **24**（3）, 135-142

浅永恭子 , 表志津子 , 佐伯和子（2007）: 慢性疾患を持つ 1 人暮らし高齢者が認識する医療機関の存在 , 北陸公衆衛生学会誌 , **34**（1）, 35-40

林暁淵 , 岡田進一 , 白澤政和（2008）: 大都市独居高齢者における子どもの有無，子どもとの関係が日常生活満足度および全体的生活満足度に及ぼす影響 . 厚生の指標，**3**, 16-22

福島昌子 , 清水千代子（2004）: 一人暮らし高齢者が自立できる要素 , 群馬県立医療短期大学紀要 , **11**, 47-55

平松慶子 , 谷口みずき , 中野麻衣 , 他 3 名（2006）: 訪問栄養食事指導における実践的な支援技術の検討　在宅療養要介護高齢者 S 氏の変容過程の分析から , 女子栄養大学紀要 , **37**, 51-58

本田亜起子 , 斉藤恵美子 , 金川克子 , 村嶋幸代（2002）: 一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討 , 日本公衆衛生雑誌 , **49**（8）, 795-801

本田亜紀子 , 斉藤恵美子 , 金川克子 , 他 1 名（2003）: 一人暮らし高齢者の特性，年齢および一人暮らしの理由による調査から , 日本地域看護学会誌 , **5**（2）, 85-89

堀井節子（1993）: 在宅老人の福祉施策の周知・利用・利用希望に関連する要因ー京都市における独居･寝たきり老人対策を中心にー , 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 , **3**, 213-219

保科寧子（2009）: 在宅高齢者を対象として対話や交流を行うボランティアサービスの機能と有効性に関する質的検討―話し相手ボランティア利用事例の分析― , プライマリケア , **32**（3）, 163-166

井筒岳 , 大竹佐久子（2001）: 豊かな高齢化社会を実現するための介護機器・住宅のあり方　ウェルフェアテクノハウス水沢における独居高齢者のハウスモニタリングシステムの研究 , 日本老年医学会雑誌 , **38**（3），329-332

井上順子 , 井手環 , 奥山真由美 , 他 1 名（2007）: 要介護高齢者が独居生活を継続できる要因　退院後一年間独居生活を継続している事例分析から , 日本看護学会論文集 : 地域看護 , **37**, 246-248

石川麻衣 , 宮崎美砂子（2008）: 高齢者のライフストーリーから捉えた健康づくりの構造　独居女性高齢者の健康づくりの意味付けを通して , 千葉看護学会会誌，**14**（2），10-19

石川隆志 , 湯浅孝男 , 津軽谷恵 , 他 3 名（2003）: 在宅高齢者の生活実態と介護予防　閉じこもり , 趣味 , 役割 , 対人交流という観点から , 秋田県公衆衛生学雑誌 , **1**（1）, 50-52

一原由美子 , 鈴江毅 , 岡田倫代 , 他 4 名（2009）: 在宅高齢者の家族形態別における精神健康度と近隣他者との交流について , 四国公衆衛生学会雑誌 , **54**（1）, 101-107

岩佐一 , 鈴木隆雄 , 吉田祐子 , 他 5 名（2006）: 地域在宅高齢者における認知機能の縦断変化の関連要因：要介護予防のための包括的健診（「お達者健診」）についての研究 , 日本老年医学会雑誌, **43**（6）, 773-780

和泉京子 , 阿曽洋子 , 山本美輪 , 他 1 名（2007）:「軽度要介護認定」高齢者のうつに関連する要因 , 老年社会科学 , **28**（4）, 476-486

介護保険情報（2009）：認知症対策を総合的に推進するために－上 , 介護保険情報 , **11**, 6-23

柄澤邦江 , 稲吉久美子（2008）: 独居高齢者における独居を継続できなくなった要因に関する研究，飯田女子短期大学紀要，**25**，21-33

河野あゆみ , 津村智恵子 , 藤田倶子 , 他 1 名（2009）: 要支援高齢者における介護保険サービス利用者と未利用者の身体心理社会的特性の比較 , 老年社会科学 , **30**（4）, 498-507

河野あゆみ , 田高悦子 , 岡本双美子 , 他 2 名（2009）: 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題　高層住宅地と近郊農村地域間の質的分析 , 日本公衆衛生雑誌 , **56**（9）, 662-673

川崎涼子 , 森下路子 , 中尾理恵子 , 他 1 名（2007）: 地域在住高齢者の日常生活行動と介護保険サービス利用状況 , 保健学研究 , **20**（1）, 49-57

喜友名悦子 , 高江洲郁子 , 大嶺千枝子（1996）: 高齢者の通院行動・服薬行動のコンプライアンスの状況と援助の方向性の検討　Y 市在宅独居高齢者の聞き取り調査から，日本看護学会集録 27 回老人看護，100-103

小島克久（2005）: 家族形態の変化と見通し , 季刊社会保障研究 , **41**（2）, 74-82

国立社会保障・人口問題研究所（2009）: 平成 20 年度版社会保障統計年報，（http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2009.asp ）

工藤由貴子（2004）: 我が国の家族構成の変化と一人暮らし高齢者 , 老年精神医学雑誌 , **15**（2）, 156-161

黒田研二 , 趙林 , 岡本悦司 , 他 3 名（1992）: 在宅要介護老人 , 病院長期入院老人 , 特別養護老人ホーム入所者の特性に関する比較研究 , 日本公衆衛生雑誌 , **39**（4）, 215-222

楠木美貴子（2007）: 一人暮らし高齢者の「援助拒否」と援助ジレンマの研究　生活実態の肯定的再認識の必要性 , 社会福祉士 , **14**, 124-132

桑原優子 , 野上タツ子（1986）: 在宅独居老人の日常生活及び健康状態の現状について , 四国公衆衛生学会雑誌 , **31**（1）, 134-138

権泫珠 , 岡田進一 , 白澤政和（2003）: 大都市高齢者の手段的ソーシャルサポートに対する選好度　選好度の構造及び選好度と基本属性との関連 , 日本在宅ケア学会誌 , **6**（3）, 29-35

松坂由香里（2004）: 訪問看護サービスを利用する一人暮らし高齢者の生活感情に関する研究 , 日本地域看護学会誌 , **6**（2）, 86-92

三原博光（2003）：高齢者に対する行動変容アプローチの実践と問題点　在宅痴呆性老人の被害妄想的表現を減少する取り組みを通して，行動療法研究，**29**（2），133-143

南貴昭 , 大迫章生 , 神村和美（2000）: 在宅高齢障害者の主観的幸福感に関する検討　デイケア利用者において，鹿児島大学医学部保健学科紀要，**10**, 141-149

森下路子 , 川崎涼子 , 中尾理恵子 , 他 1 名 : 後期高齢女性の QOL と居住歴・生活・健康状態との関連，保健学研究 , **19**（2）, 31-41

村上肇（2003）: 日常生活動作の抑制に着目した独居高齢者の体調不良の推定 , 電子情報通信学会技術研究報告（ME とバイオサイバネティックス）, **102**（726）, 57-60

内閣府（2010）：高齢社会白書平成 22 年版 ,2-55

中村勝喜（2009）: HOT 安定期に在る COPD 独居男性高齢者の自己管理に関する検討 , 日本看護学会論文集 : 老年看護 , **39**, 144-146

中尾寛子 , 平松正臣（2006）: 訪問介護サービスを利用している独居高齢者の主観的健康感に影響する社会関係要因とその独居年数による相違 , 厚生の指標 , **53**（13）, 20-27

長尾徹 , 村木敏明 , 金子翼 , 他 5 名（1996）: 阪神・淡路大震災における在宅虚弱・障害老人の日常生活活動と社会的機能の経時的変化に関する一考察 , 神大医保健紀要 , **12**, 95-101

中山貴美子（2003）: 阪神・淡路大震災被災高齢者の語りにみる生活力量形成過程と影響要因　恒久住宅に住む一人暮らし高齢者を対象に，老年看護学 , **7**（2）, 105-115

仁科聖子 , 湯浅美千代 , 小川妙子（2008）: 独居高齢者が在宅で最期を迎えるための訪問看護師の援助 , 医療看護研究 , **4**（1）, 50-56

西村昌記（2004）: 一人暮らし高齢者の生活課題　サポート・ネットワークの観点から , 老年精神医学雑誌 **15**（2）, 184-191

延近久子（1985）: 久留米市における独居老人の生活（その 1）実態調査結果と在宅ケア , 久留米大学医学部附属看護専門学校研究紀要 , **4**, 8-14

野崎昭彦 , 喜多義邦 , 上島弘嗣（1993）: 滋賀県の一農山村地域における独居老人 , 老夫婦世帯老人および在宅寝たきり老人の健康状態についての比較研究 : 有病率 , 血圧 , 心電図 , 血液検査所見を中心に，日本公衆衛生雑誌，**40**（9），850-858

奥村昌志 , 齋場寛子 , 早川富博（2003）: 中山間部における高齢者世帯の在宅療養に対するサポートの在りかた　介護保険サービス利用の解析から , 日本農村医学会雑誌 , **52**

（1）, 80-89
尾ノ井美由紀 , 小林京子 , 伊藤美樹子 , 他 1 名（2001）: 介護保険施行半年後の在宅サービス　利用率とそれに関する要因 , 癌と化学療法 , **28**（Suppl.I）, 184-187
酒元誠治 , 古家隆 , 堀之内恭子 , 他 3 名（2004）: 配食サービスの有無別独居高齢者の栄養状態 , 日本公衆衛生雑誌 , **51**（8）, 631-640
品川佳満 , 岸本俊夫 , 太田茂（2006）: 季節変動に着目した独居高齢者の在宅行動データの解析 , 川崎医療福祉学会誌 , **16**（1）, 121-128
白波瀬佐和子（2005）: 高齢期をひとりで暮らすということ　－これからの社会保障制度をさぐる－ , 季刊社会保障研究 , **41**（2）, 111-121
菅原英次 , 大田文子 , 清水温（2007）：中山間地域における高齢者遠隔医療　携帯 TV 電話の独居・高齢者世帯での活用，日本遠隔医療学会雑誌，**3**（2），163-164
鈴木絵里 , 亀山直子（2008）: 要支援・要介護独居高齢者が生活の中で抱える思い　要支援・要介護独居高齢者を支える看護，日本看護学会論文集 : 老年看護，**38**, 190-192
鈴木みずえ , 金森雅夫 , 上田昌宏（2005）：ヒューマン型ロボットを用いた独居女性高齢者のアクティビティ・ケアの試み，ジェロントロジーニューホライズン , **17**（4），392-399
鈴木敏郎 , 村瀬澄夫 , 田中智幸 , 他 1 名（2005）: 赤外線センサーを利用した介護予防に関する研究，日本遠隔医療学会雑誌，**1**（1），48-49
庄司健 , 西原美敬 , 落合嗣郎 , 他 5 名（2000）: 在宅健康管理のための独居高齢者の行動モニタリング , 電子情報通信学会技術研究報告（ME とバイオサイバネティックス）, **99**（687）, 85-90
多田敏子 , 橋本文子 , 松下恭子（2006）: 山間地域で生活する一人暮らし高齢者の介護度の変化と QOL，Quality of Life Journal，**7**（1）, 35-39
武田康代 , 小寺由美 , 熊沢昭子 , 他 2 名（2007）: ひとり暮らし高齢者の食生活の自立支援に関する要因の検討 , 名古屋女子大学紀要（家政・自然編）, **53**, 125-133
瀧断子 , 浅井さおり , 鳥谷めぐみ（2007）：積雪寒冷地に居住する独居高齢者に対するＩＴを活用した在宅運動支援プログラムの開発 , 日本ルーラルナーシング学会誌，**2**, 63-72
田中昭子 , 小西美智子（2004）: ひとり暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法，老年看護学 , **8**（2）, 63-72
田中キミ子 , 児玉直樹（2008）: 後期高齢者における自立独居の継続要因 介護サービス利用および同居への移行因子 , 医学と生物学 , **152**（6）, 203-211
富田真佐子 , 高崎絹子 , 萬田良子（2001）：在宅で療養している一人暮らし高齢者の QOL に関連する要因 , 高齢者のケアと行動科学 , **8**（1）, 50-61
内田恵理 , 三好陽子（2008）: 独居高齢者にペットがもたらす心理的効果 , 医学と生物学 , **152**（7）, 264-270
和田昌子（2002）: 在宅における高齢者の日常生活のマネジメント，高知女子大学看護学会誌，**27**（1）, 68-76
矢川ひとみ , 陶山啓子 , 加藤基子（2005）: 要介護状態にある独居高齢者の主観的幸福感に関連する要因 , ケアマネジメント学 , **3**, 70-77